

保健室登校の教育的意義

保健室登校を経験した人への面接調査の分析

有村 信子

Educational Meanings of Attendance to Only the School Health Office :
Analysis of Attendee Interviews

Nobuko Arimura

不登校等の調査によると、全国的に保健室登校の児童生徒が年々増加してきていることが指摘されている。そこで、本研究では保健室登校を経験した人を対象に、その体験について語ってもらい、経験した人の側から保健室登校の意義を実証することとした。

その結果、7事例から共通して言えることは、まず養護教諭による「無条件の受け入れ」であり、そのことで生徒の心に安心と自信が生まれ、自己肯定感が高まり次のステップに進むことができるようになった。その上で、養護教諭の「聴く」ことを主とするカウンセリング・マインドをもった対話姿勢により、自己への気づきや自己との向き合いが可能となり、徐々に自分を語り自分が見えてくるようになる。さらに、友達との交流や関係ができてくることでコミュニケーションスキルや社会性が育ち始めたり、自己表現できる何かに取り組むことで自信と自立心が同時に育つようになり、という意義が明らかになった。

Key words : [保健室登校] [教育的意義] [無条件の肯定] [自己肯定感]

(Received September 15, 2005)

目 的

本研究は「保健室登校の教育的意義」を実証する研究プロジェクト（主班：宮城教育大学数見隆生教授）の取り組みの一環として行ったものである。そのプロジェクトでは、第1段階として保健室登校生への支援経験のある養護教諭を対象とした質問紙調査（172名）、第2段階として保健室登校生への支援経験のある養護教諭を対象とした聞き取り調査（33名）、さらに第3段階として養護教諭による実践記録とその分析（6編）を行ってきた。しかし、この段階までの研究ではいずれも養護教諭の側からの調査であり、保健室登校を経験した人にとってその経験はどのような意義があったのかが、現時点で明確にされていない。

そこで、本研究は第4段階として、保健室登校を経験した人を対象に、その体験について語ってもらい、経験した人の側から保健室登校の意義を実証することを目的とするのもであり、

* 鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻養護コース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番地1号）

筆者がこの部分の研究全般を担当したものである。

研究方法

本研究における面接対象者は保健室登校を経験した人で、年齢は自己をある程度客観化できる年齢であることを前提とし、高等学校を卒業した18歳以上とした。しかし、このことは、面接そのものが回想的にならざるを得ないという問題点を含むことになる。さらに、回想的であるとすれば保健室登校を行っていた当時の心の状態以上に、今、現在の状態が強く反映されることも予想される。

実際、今回の対象者は全員面接者と初対面ではないこと、7例中5例は、対象者が保健室登校を行っていた時の、まさに当事者のひとりである養護教諭であったことも事実である。したがって、前述の回想的性の問題だけでなく、面接者である養護教諭と対象者との関係（保健室登校時だけでなく、現在に至るまで）が、聴き取り内容に影響したことは当然予想されたことである。けれども、事例の中でも紹介するように保健室登校を経験した人が少なからず、その事実を公にしたがらない傾向がある。そのため現時点では、こうした面接調査は、今回のような調査を採用せざるを得なかった状況を認めざるを得なかった。

このことは、面接調査を実施した際、上述のように対象者と面接者は初対面でなかったにもかかわらず、本研究で得ようとした調査内容を引き出すことができなかった事例があることから明らかである。例えば、3時間に及び面接に協力しても質問用紙に記入できない125歳の女性、面接で保健室登校したきっかけや保健室でどう過ごしたか話しても、「保健室登校しなければならなかった自分が悪かったから」という思いで、養護教諭や担任に対しての要望や他の質問項目に対して「別に・ない」と応える19歳の女性など、協力を求めることの難しさと保健室登校を経験したことを乗り越える難しさに直面したのである。

したがって本研究の目的は、保健室登校を経験した人の側から保健室登校をとらえるという意義を見出すものであるものの、種々の制約を受ける中で得られたデータであることは否定できず、本研究の結果の一般化には、慎重な態度がのぞまれよう。しかし、これまでこうした保健室登校を実際に経験した人を対象とした調査は、本人の自伝的報告を除けばほとんど見られない現状を考えると、本研究の調査内容は、この種の研究の進め方について大きな示唆を与えるはずである。

1 面接対象者

面接対象者は、表1に示した7名である。

表1 面接対象者の一覧

事例	性別	現在の年齢	現在の職業	保健室登校の時期と期間
1	女性	24歳	知的障害児の自立支援団体の非常勤職員	高校3年7月～2月まで(7か月)
2	女性	24歳	シナリオライターの助手	高校2年6月～3月まで(9か月)

3	女性	25歳	国立大学2年生	高校1年12月～3月まで(4か月), 高校3年10月～3月まで(6か月)
4	女性	19歳	私立大学1年生 (養護教諭養成課程)	中学1年5月下旬～3月まで (約9か月)
5	女性	21歳	国立大学3年生	高校3年9月下旬～12月下旬まで (3か月)
6	女性	22歳	私立大学4年生	高校1年9月～3年2月まで (30か月)
7	女性	19歳	私立短期大学1年生 (養護教諭養成課程)	高校1年2月～3年2月まで (25か月)

2 調査期間

調査は2003年9月上旬から2004年1月上旬にかけて、筆者の他4名の研究協力者(面接にあたった養護教諭等)がそれぞれ電話、面接等で聴き取りを行った。

3 調査方法

(1) 電話での依頼

保健室登校を経験した人へ、まず電話で面接調査の協力依頼を行った。具体的には、次のような依頼文言を作成して5名ができる限り同じ内容で面接できるよう、すなわち、この面接の目的に対する対象者の理解が同一になるように配慮した。

・「私は (所属機関) の (氏名) と申します。私は、日本教育保健学会で保健室登校に関する共同研究を行っております。」

・「今回、お電話させていただいたのは不登校児童生徒数が13万人を超え、30歳近い方々が数多く引きこもりをしていらっしゃる現在、あなたが保健室登校というプロセスを経て、社会とのつながりを保ちつつご活躍のことをお聞きし、非常にうれしく思っております。そこで、今、現在あなたが振り返られてあなたの保健室登校、そして、その後のことについていろいろとお気持ちをきかせていただきたいと思います。お電話しました。」などと依頼する。

・「お時間の許す範囲内で、あなたのご経験を教えていただき、今後の学校の在り方や引きこもりの方へのメッセージをいただき、多くの人々の幸福に寄与することを私たちは願っております。できましたら、30分～60分程度のインタビューに応じていただけませんか。もちろん、お答えになりたくないことについては、お答えいただかなくても結構ですし、お話しいただいた内容についてあなたやあなたの家族が、特定されるようなことは全くないように秘密保持には万全の注意を払いますので、是非、ご協力をお願いいたします。」

許諾を得られた場合、待ち合わせ場所または面接場所は、本人の指定する場所をできるだけ

尊重した。

(2) 実際の面接方法

対象者と面接者の個別面接を行った。面接する側にとって対象者は初対面ではないが、友人であったり、当時の養護教諭であったりするため依頼の仕方、研究の意図の伝え方、雰囲気づくり等に配慮し、対象者が自由に自分の気持ちを語れるように努めた。

このため、保健室登校経験者との面接の形式は、①現在の生活の様子や卒業後の様子等を聞いた後、本人がひとりで調査用紙に記入していく流れ、②調査用紙の項目、特に保健室登校のきっかけや保健室での過ごし方等を聞いた後、本人がひとりで調査用紙に記入していく流れ、③最初に本人が調査用紙に記入した後、面接がなされるなど対象者と面接者との関係で流れは異なった。

(3) 調査項目

すべての面接者で調査項目が同一となるよう調査項目は、あらかじめ図1のような印刷物の形にして用意した。したがって、各面接者は、この調査用紙にそって面接を行った。

保健室登校を経験した人への面接調査用紙

- ① 貴方が保健室登校をなさっていた期間をお教えてください。
(小1・2・3・4・5・6 中1・2・3 高1・2・3)
- ② 貴方が、不登校を経験されていたならばその期間をお教えてください。
(小1・2・3・4・5・6 中1・2・3 高1・2・3)
- ③ 保健室登校中に貴方は、周りの方から次のような経験をしましたか？
<養護教諭から>
ア．わかってもらえた イ．支えられた ウ．励まされた エ．その他の経験()
<学校全体から>
ア．わかってもらえた イ．支えられた ウ．励まされた エ．その他の経験()
<保護者から>
ア．わかってもらえた イ．支えられた ウ．励まされた エ．その他の経験()
<友人から>
ア．わかってもらえた イ．支えられた ウ．励まされた エ．その他の経験()
- ④ 保健室登校中の養護教諭の働きかけや言葉で、うれしかった・良かったことはありましたか。
- ⑤ 保健室登校という経験を通して、学んだことや身に付いたこと、プラスになったことについて教えてください。
- ⑥ ⑤でお答えになったことで、保健室という場や、養護教諭が役に立ったのであれば、そのエピソード(お話)を話していただませんか。
- ⑦ どうして、教室よりも保健室を選ばれたのか、教えてください。
- ⑧ もし、可能であれば、保健室へ登校する「きっかけ」を教えてください。
- ⑨ 現在、保健室登校をしていた時を振り返って、担任や養護教諭、保護者に対して、してほしかったこと(実際にはしてもらわなかったこと)を教えてください。

< 養護教諭 >
 < 担任・他教師 >
 < 保護者 >

⑩ 現在、保健室登校している子どもたちに、メッセージ（アドバイス）がありましたら、教えてください。

⑪ 現在の職業、将来の展望を教えてください。特に、保健室登校の子どもへの支援などお考えでしたら、教えてください。

図1 保健室登校を経験した人への面接調査用紙

結果と考察

保健室登校経験者との面接では、対象者が質問用紙を書く前に時間をかけて今まで正面から向かい合っていなかった過去を振りかえる作業をしたり、面接の中で保健室登校当時を思い出して言葉に詰まったりする場面が見られた。

したがって、聴き取り調査で得られた内容は、それがそのまま客観的事実として存在するというより、対象者自身のこうした作業や葛藤の結果を反映したものであることは当然であろう。その意味で図1に示した調査用紙は、通常の単なるアンケートではなく、数量的分析になじむものではない。ここでは得られた結果の量的側面に注目するのではなく、質的側面、特に対象者の具体的発言に注目して報告することで、その後の分析に供したいと考える。

保健室登校経験者との面接及び記入された調査用紙を基に、各事例の概要及び事例を通しての保健室登校の意義等をまとめると、以下のようになる。

1 各事例の概要

保健室登校経験者の7事例については、保健室登校の期間やどのようなきっかけで保健室登校を始めたのか、また保健室ではどのように過ごしていたかについて各事例の概要をまとめた。

(1) 事例1（女性・24歳）

< 保健室登校の期間ときっかけ >

期間：高校3年7月から卒業まで（7か月）

きっかけ：友達関係を保つためにその友人に嘘をついたりした。また学校の授業についていけなかった。何でも言い合える親友と思っていた子に、きつい言葉を言われて全部が嫌になって2週間不登校になった。トラブルを起こした友人が教室にいるので、教室に行けなくなった。

養護教諭の先生は前々から良き相談者であった。自分が不登校になっていることを知って保健室登校を勧めてくれた。養護教諭の先生が言うなら保健室登校をしてみようと思った。

<保健室での過ごし方>

- 養護教諭の先生とは、和やかな雰囲気の中でいろいろと雑談をした。
- 養護教諭と他生徒の会話を側で聞いていた。例えば、教室ではクラスメイトをいじめることもあるような強い立場にある生徒が、保健室で養護教諭に自分の悩みを話していた。それを聞いて、「つらいのは自分だけではない。人は外見だけではわからない。人はその内面にいろいろの思いを抱き、多様な面を持っていると認識した。」
- 保健室に来る生徒とは、養護教諭を介して会話をしていた。保健室登校開始から約半年後の卒業間際には、保健室登校のきっかけとなり、自分の悪口を言っていた女子生徒ともあいさつを交わしたり、女子生徒の働きかけに対して反応したりすることができるようになった。
- 教科の勉強をした。保健室登校をしている私を理解した先生の教科、必要な単位の教科、実習（工業高校なので測量実習）を含めすべて勉強した。その際、すべての教科の担当教師がかかわってくれ、個別に指導してくれた。各教科の先生たちからそれぞれ必要な課題を出され勉強をした。

各教科の先生に与えられた課題はもちろん、プリント及び問題集を解くなど受験勉強をしていた。解らない所など先生が個別指導してくれた。特に、英語は先生の個別指導がきっかけで好きになり、意欲的に取り組んだ。だんだん英語の成績も上がり、自分への自信につながった。

(2) 事例2 (女性・24歳)

<保健室登校の期間ときっかけ>

期間：高校2年6月から3月まで(9か月間)

きっかけ：教室では、呼吸ができないほど息苦しくて生活ができなかった。欠席して家にも落ち着かなかった。また、教室では一人の友人もいなかったが、強がって寂しくないふりをしていた。あまりに辛くて2週間ほど学校を休んだが、落ち着かず保健室に行った。「落ち着くまでいていいよ。」と養護教諭が言ってくれたことで安心して学校に来ることができた。保健室では、自分の淋しさを話すことができ、保健室で時間をかけて自分の答えを出したかった。学級担任との折り合いが悪く、母親が保健室登校を勧めてくれた。また、母親は担任と話し合っ保健室登校の了解をもらってくれた。

<保健室での過ごし方>

養護教諭とのたわいのない話を通して「保健室登校があなたにとって、今、必要なこと」と言われ続けた。自分は読書が生き甲斐のようだったので、先生と同じ本を読んでその感想を話したり、「お勧めの一冊」の交換をしたりした。

同じ時期に保健室登校していた人(年齢は本人より3歳上。学年は1年生で長期欠席後に保健室登校してきた生徒)と12月から一緒に机を並べて勉強を始めた。勉強を教えあったり、家庭の様子を話したりした。同じ保健室登校なので安心してなんでも話げできた。

保健室に同じクラスの生徒が体調が悪くて来室した際、初めて自分から声をかけることができた。また、保健室掃除が自分のクラスの担当だったので級友と一緒に掃除をした。

教科担当者が保健室に来て個別に指導してくれた。学習面だけでなく、個人的なたわいの

ない会話が楽しかった。「先生」を自分が理解していないことがわかった。家庭科や体育などの授業は別な教室で個別に指導を受けた。

保健室では印刷物を綴じたり，保健室来室者の統計をとったり，アンケートをまとめたりするなど養護教諭と一緒に行動した。養護教諭の手伝いをしながらの会話が楽しかった。

シナリオライターを目指していることを話したところ，養護教諭から自分史を書くことを勧められた。はじめは何を書くか悩んだが，2日目から何かにとりつかれたように書き始めた。国語科の教師から「自分史」を提出することで2年生の国語の単位を認定する，と言われたので提出した。

(3) 事例3 (女性・25歳)

<保健室登校の期間ときっかけ>

期間：高校1年12月から3月まで(4か月)，高校3年10月から3月まで(6か月)，保健室登校以外は自宅で生活している。

きっかけ：ほとんど面識のない養護教諭が，2年近く定期的にはがきをくれたことで，自分にも「居場所」があると感じられた。中学校の時は見放されたような気がしていたが，高校では自分の居場所があることがうれしかった。2年間留年したのに居場所を確保してくれたことの意味が大きかった。18歳の誕生日に一歩踏み出したかったので，自分から養護教諭に電話をして保健室登校を始めた。

<保健室での過ごし方>

養護教諭とは会ったことがほとんどなかったが，自分の思っていた通りの先生で安心してなんでも話すことができた。同じ種類の犬を先生が飼っていたので，犬のことを中心に話した。

同じ時期に保健室登校していた生徒(2年生で9月から保健室登校をしていた人)がいたので，自分も居ていいのではないかと思い安心して居られた。本の好きな人だったので本のお話をよくした。

放課後，同じ時期に保健室登校をしていた生徒や保健室掃除担当の生徒と一緒に掃除をした。掃除に来た生徒は，自分を特別扱いせず一緒に掃除をさせてくれた。

教科の学習は，各教科の先生方が入れ替わり立ち替わりして授業をしてくれた。校長先生が校長室で数学を教えてくれた。緊張したがうれしかった。先生方のためにも頑張ろうと思った。

保健室では，養護教諭や保健室登校をしていた人と一緒に資料の綴じ込みや統計の手伝いをした。作業をすることで「養護教諭のためになりたい」と思った。

同じ保健室登校をしていた生徒が，自分史を書いていたので自分もやってみた。しかし，いろいろ考えすぎてなかなかはかどらなかった。自分以外には養護教諭にしか見せていない。

(4) 事例4 (女性・19歳)

<保健室登校の期間ときっかけ>

期間：中学1年5月下旬～3月(約9か月)

きっかけ：中学校に入学早々、インフルエンザにかかり1週間欠席した。その後も体調が悪く微熱がだらだらと続いた。喘息様症状も出て保健室利用が多く早退を繰り返していた。ある日、教室に行った時女子のグループが固定化していて、その中に入っていけない雰囲気を感じた。「この教室は自分の居場所じゃない。自分がここにいていいのだろうか。」と感じてしまった。学校に来てもしんどくて保健室で養護教諭の先生と話したり休んだりして、少し元気になると教室へ行くのを繰り返していた。学級担任は教室に行けない私を受けとめてくれ、養護教諭の先生とよく連絡を取っていた。教室にいる時間より保健室での生活がだんだん長くなり、いつの間にか保健室登校になっていた。

<保健室での過ごし方>

その時々抱えている問題を養護教諭と話したり、自分の気持ちを文章や絵で表現して話し合ったりしていた。

保健室来室の生徒との交流で、自分を見つめたり生き方を考えたりしていた。

上級生(生徒会メンバー)との交流の中で、和太鼓と出会い練習に参加するようになった。その中で「いい音をつくりだそう」とみんなで心を重ねる経験をした。この経験は「人間への信頼」を回復させてくれた。

教科学習は教科担任が届けてくれるプリントで学習したり、テスト前には友達や先輩に教えてもらったりしながら勉強した。

学級担任がよく保健室に来て学級で起こっている問題を話してくれたので、学級の様子がよくわかった。

(5) 事例5 (女性・21歳)

<保健室登校の期間ときっかけ>

期間：高校3年9月下旬から12月下旬(3か月)

きっかけ：小学生の時にじめを受けた。中学2年生の時は友人を信じられず、1年間学校に行かなかった。高校に入学して2年の秋、友人関係のトラブルをきっかけに保健室利用が多くなり、その後不登校になった。3年次も不登校状態を続けていたが、9月下旬に母親へ「保健室なら行ける」と話した。母親は担任を通じて養護教諭に保健室登校を依頼し、保健室登校が始まった。

<保健室での過ごし方>

養護教諭とは、友人のこと、家族のこと、部活動のことなど日常あったことや自分の話したい身近な出来事を話題にした。

保健室に来室した生徒に対する養護教諭の対応、例えば、養護教諭としての姿勢・生き方・考え方等を側で聞いていた。

不登校傾向の同学年の男子生徒、同じく2年生の女子生徒、比較的頻繁に保健室に来る生徒たちと交流していた。

読書で多くの時間を過ごした。また、絵画(デッサン)、詩を創ったりした。

教科担任が保健室にやってきて学習について少し指示したり、課題を出したりした。出された後は一人学習をしていた。

(6) 事例6 (女性・22歳)

<保健室登校の期間ときっかけ>

期間：高校1年9月から3年2月まで(30か月)

きっかけ：高校1年から授業と授業の合間には必ず来室して、始業のチャイムと同時に教室に戻る行動が見られた。そんな状況の中、本人と面接した結果、中学3年時教室でおならが出たのをきっかけに教室に入ることができなくなったこと、高校入学後は毎朝整腸剤を服用して登校していることなどが分かった。この情報を担任と保護者に伝えたところ状況を知らなかった保護者は驚いたが、本人の望む保健室登校に理解を示した。高校1年から3年間は主に腹痛が身体症状として出現し、授業に出ていても少し疲れると保健室で休息するという状況であった。特に3年の11月からは、大学受験を控えて緊張感と不安がいっぱい、終日保健室で過ごす日も多くなっていた。

<保健室での過ごし方>

自分のことを積極的に話すことはあまりなく、会話の中では養護教諭の話をしっかり聞いているという姿勢であった。

体調が良いときは教室で授業を受けてノートをとっていたが、各教科の時数不足分の課題が多く一人でコツコツと自学自習を続けていた。

体調が悪く保健室で何もしないで過ごすときもあったが、学校を休むことはなかった。

職業系の高校であり、その関係の雑誌を読んだりしていた。

(7) 事例7 (女性・19歳)

<保健室登校の期間ときっかけ>

期間：高校1年2月から3年2月まで(25か月)

きっかけ：中学校3年の3学期から給食の時、手が震えて給食が食べられなくなった。このとき養護教諭の先生が「保健室で食べていいよ。」と声をかけてくれ2人で食べていた。高校1年の11月頃から授業中や昼食時間にどうしても緊張してしまい、下痢や腹痛があり体調が悪くなった。しかし、湯たんぽを抱いて授業を受けていた。2月になり数学の時間は教室に入れなくなった。たとえ教室に入っても教師の顔や黒板を見られず授業に全く集中することができなくなった。しかし、保健室にいると安心感があった。これまでいろいろなことを相談していた養護教諭の勤めがあり、母親も賛成して保健室登校が始まった。

<保健室での過ごし方>

1年次は毎朝、ショートホームルームの時に教室へ顔を出していたが、気持ち的に大変であった。しかし、2年次からショートホームルームには行ける時だけ行くようになった。

保健室では、カーテンとロッカーで入り口から見えにくい位置で、養護教諭の先生のそばに机を置いて勉強をしていた。

保健室ではほとんど朝補習から6限まで時間割にそって自己学習をしていた。教科担任がプリントや課題を出すときもあった。このときは自分で職員室に取りに行くようになっていた。また、分からないところは各教科の先生がいる職員室に聞きに行っていた。職員室に行くのは辛かった。保健室で教科指導してくれた先生は、数学と化学の先生であった。

1年次は女性で優しい英語教師の授業だけ教室で受けることができた。2年以降は、全く教室で授業を受けられなくなった。なお、2・3年はこの女性英語教師が担任になった。休憩時間は、生徒が来るのでほとんど勉強をしていた。生徒がいなくなると、「お茶を飲もう。」と養護教諭に誘われたり、昼食を一緒に食べたりしていた。養護教諭の先生が2人とも保健室を空ける時、生徒や先生たちの対応など留守番を引き受けていた。放課後は、いつも一緒に帰る友達と養護教諭の3人でいろいろなことを話して、楽しい時間を過ごしていた。

2 各事例の保健室登校の意義

7事例のうち5事例は、保健室登校の一方の当事者である当時の養護教諭によって聴き取りされたものである。したがって、面接者は対象者と面談する中であらためてその対象者にとって保健室登校がどういった意義を持っていたのかを気付かされる結果になった。ここでは、各面接者が記録した各事例における保健室登校の意義に相当するものである。

(1) 事例1

受容の場としての保健室

「不登校になった理由が私自身の性格に問題があったにも関わらず、養護の先生は私を責めず温かく見守ってくれた。」「私がつらいときに何も訊かず無条件で受けとめてくれた」ことで、自分は一人ではないという安心感を得られた。

養護教諭が他教師に理解を求め、保健室登校生への支援を促がしたこと

この高校では初めての保健室登校ということで、当初はなかなか他教師の理解が得られない状況であった。しかし、養護教諭が単位取得や生徒理解をめぐる会議等で話し合いを続けた結果、他教師が教科指導や進路指導など個別的な支援を行うようになった。

保健室で他生徒と関わることが他者理解につながったこと

他生徒が保健室に来室し、養護教諭に悩みなどについて話しているのを側で聞いていて、保健室登校以前は見えなかった他の生徒の深い一面に触れることができ人間の多様性を学んだ。さらに、他の生徒と自分とを比較し、辛い状況にあるのは自分一人では無いと感ずることで、他者への理解を深めた。

自己対峙から夢実現へ努力したこと

保健室で過ごす時間のなかで自分と正面から向き合い「自分の悪いところも素直に見つめ直せた。」と自己を客観視できたことがうかがえる。また、卒業後に自分のやりたい将来の夢ができ進路決定を行った。夢の実現に向かって教科担任や養護教諭の支援を得て努力する過程に人間的な成長があった。さらに目標を達成したことで自信が得られ、自己存在感や自己肯定感を持つことができた。

(2) 事例2

受容の場・居場所としての保健室

養護教諭が「落ち着くまでいいよ。」と言って無条件で受け入れてくれたこと。自分に「居場所」があることがうれしかった。また「大切な人だから。」と言われたことが、自

分の存在を認めるきっかけとなった。

養護教諭の働きかけで、他教師が保健室登校を理解して学校全体で支援したこと。

「生き直し」としての保健室

自分の感情を言葉に表せるように、私が話すのを養護教諭はいつまでも待ってくれた。(保健室登校をしている中で)力を抜いて生きることを学んだ。また、同じ保健室登校をしている人と感情を共有することでコミュニケーションスキルが高まった。

(3) 事例3

受容の場・居場所としての保健室

「ここにいてもいいですか。」と毎日確認する私に「あなたの場所です。」と必ず言ってくれたこと。自分に「居場所」があることがうれしかった。

養護教諭が他教師に保健室登校を理解するよう働きかけ、学校全体で支援したこと。

特に管理職が理解してくれ、個別に勉強を教えてくれたことで自分の存在感を高めることができた。

「生き直し」としての保健室

自分の言葉で自分を表現するように、養護教諭はいつまでも待ってくれた。また、同じ保健室登校をしている人と感情を共有することでコミュニケーションスキルが高まった。

(4) 事例4

保健室来室生徒の訴えを媒介に、自分と正面から向き合える場としての<保健室>

今ある自分をそのまま受けとめてもらうことで、「安心感」を回復させることができる。安心感を実感できれば、少しずつ生きるエネルギーが蓄積できる。

様々な問題にぶつかり悩み葛藤している生徒の思いを聞いたり、交流したりする中で、人間理解の幅を広げるとともに、自分自身を見つめることができる<保健室>

「保健室登校という体験がなければ、今の自分はない。今まで出会った人の中で1人でもかけたら(今の)自分はないと思っている。」「人の一部分だけ見て思い込むことがなくなった。視野を広げないと、結局自分が傷つくことになって苦しまなければならない。」

対等な感じや意志の表明が保障される場としての<保健室>

自己肯定感の回復と人間の信頼感を土台にして、表現力(気持ち・意志・意見)と社会性の発達を支援し保障していく場としての<保健室>

(5) 事例5

居場所づくりとしての保健室

「何となく養護の先生がわかってくれそうであったから保健室へ行った。」

本人の社会性を育てる場としての保健室

「保健室という場で、下級生や同級生と関わられた。」

(6) 事例6

養護教諭が専門的な立場で生徒を見守る場としての保健室

受容の場としての保健室

長期間に渡ると、(生徒の変化がほとんどないため)担任との連絡が希薄になり、時数不足分の教科について連絡すべきことが疎かになり反省する点となった。保健室登校について

他教師の理解が得られ、保健室内を「パーテーション」で区切ることができよかった。

養護教諭が他教師に理解を求め、保健室登校生への支援を促したことの意義

他教師の理解について、本人は成績も良く前向きで、入学当初から農学部への進学を希望して現状でやれることをやっていたために、学校全体で温かく見守っていた感がある。保健室登校をしている中、何よりも家族が試行錯誤しながら子どもを理解しようとする態度が本人に伝わり、家族との信頼関係が築けたことがよかった。

(7) 事例7

受容の場としての保健室

誰にも相談できず悩みを抱えていたが、保健室だけは唯一自分の本音を語ることのできる場所であり、自分が思ったことを言っても受けとめてくれる温かい養護教諭と出会えた。

心身症に焦点を当てた保健室登校の事例

保健室にいと症状が落ちついて、教室へと背中を押されると身体に症状が出てきた。保健室登校が長期にわたったが、保健室に居ざるを得なかった。

3 保健室登校中、周りの人にしてほしかったこと

保健室登校中に、周りの人にしてほしかったこと（実際にはしてもらえなかったこと）を挙げてもらい、「してほしかった」対象者別にまとめると以下のようになる。

(1) 養護教諭へ

保健室に生徒が多数来室している時は居づらかった。より見えない場所がほしかった。

(2) 担任・他教師へ

担任からは教室に入れない理由を分かってもらえず、ほぼ男子校だったので「男性恐怖症だろう。」と言われた。他の先生方も初めは教室に行かないと出席を認めないと言われた。(最後には行かなくても認めてくれたが。。)

担任をどうしても好きになることができず、逃げ出すことばかり考えていた。もっと(苦しみ)を)分かってほしかった。

「教室に行きなさい。」を言わない方がよい。プレッシャーになり焦る。

きつい言葉を言ってほしくない。温かい言葉をかけてほしかった。変な目で見てほしくない。

(3) 保護者へ

母の思い通りになりたくなかった。母がとても苦手だったが、だんだん変わってきた。

不登校になり始めた頃、朝起こしてくれていた母親が次第に起こさなくなって「見捨てられたのでは」と思った。

父親には「負けんな！」と激励されたのが、一番嫌だった。言われる度に「今の私には無理！精神力は残っていない」と思った。体がしんどくなるくらい心が滅入っていた。

もっと子どもの悩みや気持ち・思いを分かてもらいたかった。怒るのではなく、もっと優しく接してもらいたかった。せめて家だけでも安心していられるような環境であってほしかった。

(4) 周囲のすべての人へ

「当時、何をしても楽しくなかったし苦しかった。私のことを分かってほしかった。」

「誰かに対してではなく、保健室登校の生徒の周りの人に対して、もっと保健室登校に対して理解をもってほしいと思う。」

これら保健室登校をしていたとき「してほしかったこと」は、「(苦しみや気持ちを)わかってほしい」「(教室へ行けと)言わないでほしい」「関わり続けてほしい」「(温かい)言葉をかけてほしい」などである。ところで、養護教諭への「してほしかったこと」は、ほとんど見当たらない。これは当時関わってくれた養護教諭であり、直接面と向かって言いづらかったであろうことが十分予想される。ただ、この質問は「養護教諭の働きかけや言葉で、うれしかった・良かったこと」との関係でみる必要がある。つまり、ここで挙げられたことを保健室登校している生徒は求めていることになるからである。そこには、「無理に教室へ行かせなかった」「居場所を作ってくれた」「受け入れてくれた」「わかってくれた」「声をかけてくれた」「いつも笑顔があった」など、生徒の存在を認め常に生徒の心身の状態を受けとめて、それに合わせようとする養護教諭の姿があった。

4 保健室登校している子どもたちへのメッセージ

高校を卒業して1年～4年が経過したそれぞれの体験者から、保健室登校の当時を振り返って、現在保健室登校している子どもたちへメッセージをもらった。そのメッセージを以下に示す。

(1) 事例1

「私もあの頃は学校と家の往復で、それだけがすべてだと思い、その中で友だちを作ろうと必死にもがいていた。でも、卒業して無理をして作った関係は続かないし、不健康だと思ったし、必ず自分を受け入れてくれる人はいるのだと思った。今、思えばあの頃の私は家族や先生に恵まれていたのだと思う。…と言ったところで、今、現在不登校に直面している人には受け入れられないことだと思う。」

(2) 事例2

(保健室登校は)自分のために「必要な時間」ととらえ、焦らず暮らしてほしい。

(3) 事例3

「何年かかっても自分の問題(保健室登校のきっかけとなったことなど)を解決していくべきだと思う。」

「焦らず自分のペースで進んでいってください。」

(4) 事例4

「“いじめ”は、中学生のほとんどが経験している。心の傷を乗り越えるためには、社会(人間集団)の中で、安心して自分を語る人々に出会い、その中で乗り越えられるのだと思う。」

「まわりの人たちは、ひきこもりまで行かないように、外につれ出してあげるよう働きかけることが大切である。」

(5) 事例5

「自分の夢をあきらめないで。」

「心を閉ざさないで。」

(6) 事例6

「一步、外に出てみてください。手を差し伸べれば、周りには助けてくれる人がいるはずですよ。」

(7) 事例7

「無理をせずに」、「あせらずに」、「ゆっくり」と自分のペースで進んでいってください。これらのメッセージには、3つの点を読みとることができる。1つは頻繁にでてくる「焦らずに」、2つ目には「心を閉ざさない」「周囲の人との関係を作ろう」、3つ目には自分のために「必要な時間」というように保健室登校自体への意識である。これらのメッセージから保健室登校は、「焦らずに自分のペースで、他者の力を借りながらも人間関係を築き、自分の問題を解決するのに必要な時間」として意義があったことが明らかとなった。

まとめ

1 各事例を通してみえた共通性

結果のところでは各事例の調査結果については、明らかにしてきた。7事例には各事例の個別性も明らかに存在するが、一方で共通性も明らかに存在している。

本研究の目的である保健室登校の意義の検討のためには、この共通性を分析することが重要であろう。ここでは、見いだされた3つの共通性を提示し考察していくことにする。

(1) 養護教諭は、「責めない」「温かい」「無条件で受け入れる」などの対応をしている。

その結果、保健室は生徒にとって「心と体の居場所」となり、養護教諭に「受容」された結果として生徒は安心でき、自信が生まれ、自己肯定感が高まり、次のステップに進むことができるようになっていく。

(2) 養護教諭との会話から自分の行動や考えが見えてくる。

養護教諭との会話を通して、自分と向き合い自分の気持ちや感情を自分の言葉で少しずつ話し始めると、だんだんと本来の自分が見えてくる。

(3) 保健室で他の生徒の様子を見聞きしたり、交流したりする中で人間理解が深まる。

本来の自分が見えてきた後に、人の話を聴いて自分と置き換えることができるようになる。また、人とコミュニケーションがとれコミュニケーションスキルや社会性が育っていくようになる。

(4) 保健室を自ら学習の場として、自分の目標に向かっていく。

7事例のうち6事例が高校時代の保健室登校経験者を対象としているためか、養護教諭の教育的配慮のもと担任や他教師の理解や支援を得ながら保健室で計画的に学習を進め、中には保健室登校生同士、競い合いながら学習をしている。

2 各事例の「個別性」から学ぶもの

この7事例の中で「特定の生徒とうまくいかない」「担任と折り合いが悪い」といった事例では、一時避難的な保健室登校が起こるのである。この場合、教室以外の場としての保健室を求めて避難して来る者、担任教師と養護教諭とを比較して養護教諭のもつ雰囲気によって避

難してくる者がいることが予想される。不登校の子どもが100人いたら100の対応があると言われる。保健室登校も同じことが言え、7事例の保健室登校への対応はまさしくその通りである。

保健室登校を経験した人の語りを聴きながらも面接者自身の言葉の受け止め方には限界があり、保健室登校の意義としては共通性が多く見出されることになった。しかし、保健室登校の意義を考えるならばもっと個性性こそ重要である。保健室登校には多様なニーズがあり、意義があるのではないかと思われる。そのような個別な意義を明らかにするために、今後、面接方法を工夫し保健室登校の事例数を増やす必要がある。

3 研究方法論をめぐって

前述したように、あくまでもこの研究は面接者自身が養護教諭として面接対象者の保健室登校にかかわったという事実のもとで得た調査内容である。そのことは、この面接調査に対象者が応じてくれたという事実は、保健室登校当時のみならず現在も面接者と対象者の間に決して対立的関係が存在していないということを物語るものでもあろう。

すなわち、もし養護教諭と対立的な関係があったり、自分の保健室登校経験そのものに対して否定的・抑圧的な保健室登校経験者の態度は、こうした面接調査そのものへの拒否につながったはずである。

こうした制約のなかで得た調査であるにもかかわらず「周囲の者にしてほしかったこと」(実際にはしてもらわなかったこと)を養護教諭に対しても記述が見られることは注目すべきことであろう。すなわち、こうした面接調査に否定的になる保健室登校経験者がいた場合、そうした要望は一層強いことも予想されるからである。また、ラポール関係が築けているからこそ、言葉にできないところをうまく言葉にして引き出すことができたメリットもある。

保健室登校の当事者は、まさに保健室登校している児童生徒本人である。保健室登校の教育的意義を見い出そうとする本研究において、従来からしばしば行われている養護教諭を対象としたデータ収集にとどまらず、保健室登校を経験した当事者本人からデータを得ようとするものの意義は大きいものがあるはずである。しかし、繰り返し述べたように、そこに種々の制約が存在しており、保健室登校経験者から得たデータのみで保健室登校の意義を分析することは困難である。したがって、本プロジェクトのようにあらゆる方向からの研究を総合した形でのみ保健室登校の意義を実証する方法になりうると考える。

参考文献

- 有村信子：保健室登校等の児童生徒に関する学生の意識，鹿児島純心女子短期大学研究紀要，34，11 - 21，2004
鹿児島県総合教育センター研究紀要：不登校児童生徒への指導・援助の在り方に関する研究 保健室等登校児童生徒への対応を通して ，通巻第106号，2003
数見隆生：保健室登校生への支援とその教育的意義に関する調査研究，日本教育保健研究会年報，第10号，37 - 45，2003
数見隆生，伊藤寛生：保健室登校に関する研究（第1報） 保健室登校の実態に関する傾向 ，第48回日本学校保健学会，268 - 269，2001
伊藤寛生，数見隆生：保健室登校に関する研究（第2報） 保健室登校の教育的意義に関する検討 ，第48回日本学校保健学会，270 - 271，2001

鹿児島純心女子短期大学研究紀要 第36号 (2006)

藤田和也：教室へ行かない子どもたちとともに 保健室登校・不登校・ツッパリ・いじめ ，東山書房，1996

保健体育審議会答申：生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツ振興のあり方について（答申），保健体育審議会，28 - 29，1997

日本学校保健会養護教諭研修事業推進委員会：保健室来室者等への対応に関する調査集計結果，養護教諭が行う健康相談活動の進め方 保健室登校を中心に ，(財)日本学校保健会，45 - 74，平成13年

日本学校保健会養護教諭研修事業推進委員会：保健室利用状況に関する調査報告書，(財)日本学校保健会，13 - 14，平成9年